

## 東京における街路樹の樹種変遷と環境思想

武内和彦\* 米瀬泰隆\*\*

明治に始まった東京の街路樹植栽は、江戸の伝統を引き継いでサクラなどが植栽されたが、やがて耐性の強いヤナギの画一的植栽が広まった。東京市区改正以降は、樹種選定も慎重になり、外来落葉樹を主体とした「行道樹改良按」がまとめられた。この改良按は、関東大震災後の帝都復興事業でイチョウの街路樹が防火帯とされるなど街路樹分布に大きな影響を与えた。また、公害の時代には常緑樹が選ばれるようになり、近年はアメニティ重視の立場から花木も多く使われ始めた。街路樹の樹種選定は、それぞれの時代の都市の環境思想を反映したものと言える。

### Changing Ideas on Selecting Species for Street Planting in Tokyo

Kazuhiko TAKEUCHI\* Yasutaka YONESE\*\*

Roadside tree planting, which began in Tokyo in the Meiji period, inherited the cherry blossom tree planting from the Edo period but, before long, the hardy willow became widely adopted. Ever since the “Replanning of Tokyo”, the selection of tree species has been more discerning, resulting in a “Roadside Tree Planting Improvement Program” consisting mainly of deciduous trees. During “Imperial Capital Restoration Project” after the Great Kanto Earthquake, this program greatly influenced the pattern in which trees were distributed. This can be seen in the use of Ginkgo trees as firebreaks along the sides of the roads. Increasing air pollution has also prompted the use of evergreen trees and flowering trees have also begun to be used as a result of recent emphasis on the quality of living environment. The selection of a species for roadside planting can be described as a reflection of the urban environmental concept of that particular age.

#### 1. はじめに

都市の街路樹は、単なる街路の装飾物ではない。それは、人工物の優先する都市において、自然らしさを演出する重要な環境装置である。これまで街路樹は、都市気候の緩和や都市美観の向上に寄与すると言われてきたが、最近では、生態学の立場から、野生生物の都市内の移動や避難場所としても注目さ

れる<sup>36)</sup>に至っている。

都市の環境装置として街路樹を見るとき、最も重要なのは、樹種の選択である。街路樹は、一方で気候条件や土壌条件に影響を受けると同時に、外来樹種の導入が多くなされるなど、ある程度まで人間の意思にそって植栽することが可能である。本論文では、東京を対象に、文献資料に基づいて明治以降の街路樹の樹種変遷を分析し、それぞれの時代における環境思想との関係を考察した。

ところで、日本に街路樹が本格的に導入されたのは明治時代に入ってからである。それまでは、平城京と平安京には列状の街路並木があったという記録はあるが、並木のほとんどは、よく知られているように街道並木や参道並木に限られていた。江戸にお

\* 東京大学アジア生物資源環境研究センター教授  
Professor, Asian Natural Environmental Science  
Center, The University of Tokyo

\*\* ㈱森緑地設計事務所  
Landscape Architect,  
Mori Landscape Architects Inc.  
原稿受理 1996年1月29日

いても、墨堤のサクラ、神田川堤のヤナギを除いて列状並木はなかった<sup>9, 26, 31)</sup>。街路樹も日本の文明開化とともに誕生したと言える。

並木と街路樹に明確な用語の区別はない。明治時代に入ってから並木という言葉はよく使われた。街路樹という用語が登場するのは、大正末期のことであり、またそれが人口に膾炙したのは1935年頃とされる<sup>20)</sup>。あえて街路樹固有の特徴を述べれば、それは歩車道を区分した線上、ないしは車道中央部に整然と植栽された樹木群である。本論文では、このような特徴をそなえた都市内道路の並木を街路樹と呼ぶ。

## 2. 東京における街路樹のはじまり

東京の街路樹は、1868年の東京府開庁と同時に始まった。当時は、江戸の並木の伝統を受けて、新島原(京橋)、根津門前(本郷)、猿楽町の往還中央にサクラが植栽された<sup>17)</sup>。サクラは、江戸庶民にとって重要な花見の樹木であり、八代将軍・徳川吉宗も、墨堤のほか、城北飛鳥山、品川御殿山、小金井の玉川上水堤にサクラを植え、民衆の期待に応えた<sup>35)</sup>。明治以降も、サクラは重要な街路樹であり続ける。例えば、1879年には、英国大使館前道路(麴町)にソメイヨシノが植栽されるが、この地は以降、市内有数のサクラの名所となった<sup>17)</sup>。

東京で本格的な街路樹の嚆矢とされる1872年の銀座通りの植栽樹種も、サクラ、クロマツ、カエデであり( Photo 1 )<sup>17)</sup>、江戸の並木の伝統を受け継いだものである。銀座通りは、英国人トマス・ウォートルス設計の欧風煉瓦造り建築に対応して造られ、19世紀パリのプルバールをモデルにしたものとされる<sup>30)</sup>。広い歩道を有し、街路樹は歩車道境界線の車道側に等間隔に植栽された。銀座通りでは、日本の伝統的な並木樹種の選定と、欧米に範を求めた近代的な街区設計が同時に追求されたのである。これは、当時、近代街路に適した街路樹の選定基準をもたなかったためと考えられる。

しかし、当時の銀座は、新しい埋め立て地であったため、土壌層の発達が悪く、また東京湾に近いため塩害の影響を受けた。加えて当時は街路樹の保護管理が悪く、上記3種の樹種はことごとく不良になり、6年後にはすべてヤナギに置き換えられてしまった<sup>14)</sup>。これが有名な「銀座の柳」の始まりである。

同様の失敗は、1874年の八重洲通り堀端のニセアカシア植栽、1875年の大手町堀端のシンジュ植栽に

おいてもあった。これらは、銀座通りほど急激にはなかったが、徐々にヤナギに置き換えられていった<sup>15, 17)</sup>。こうした失敗を踏まえて、「東京の街路樹種としては耐乾性、耐湿性ともにすぐれたヤナギが最適という結論に至り、新設の広幅員街路にはすべてヤナギが植えられるようになった」と、後に東京市で街路樹植栽の中心人物となった井下清は述べている<sup>21, 23)</sup>。

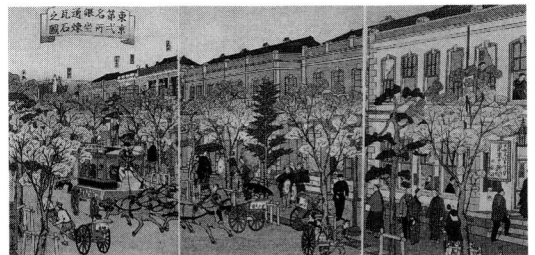
この時代の街路樹植栽の背景には、街路樹の環境保全機能を高く評価しようとする姿勢も認められる。1879年に津田仙は『擁道樹論』を公表し、従来の並木の意義が、緑陰による旅人の保護や非常時の用材供給程度しかなかったのに対して、街路樹は「気候の寒暖の調節」「市街の修飾」「沿道の住民および来往の行人の衛生」「道路崩壊欠損の予防」の四つの意義を有するとした。彼は、人口密度が高く、人工環境が優位となっている市街地の特性を踏まえた上で、とくに気候の寒暖の調節、沿道の住民および来往の行人の衛生の意義を強調した。また彼は、市街地の特性として今日言うところのヒートアイランド現象を指摘し、その緩和のために樹木の植栽が有効であるとしている<sup>23)</sup>。

## 3. 東京市区改正と街路樹種の選定

### 3-1 街路樹種はどのようにして選ばれたか

東京においては、1888年に今日の都市計画法制度の草分けである東京市区改正条例が公布され、翌年すぐに施行される。この条例に基づいて、首都の大改造が始まるのである。こうした改造に伴って、広幅員街路が設けられるようになり、街路樹の植栽はいっそう活発になる。それにあわせて、近代都市にふさわしい街路樹の樹種はいかにあるべきかについての検討が進んだ。

1900年代に入ると、ヤナギは、防風対策、家屋の



サクラ、クロマツ、カエデが植栽されている。

Photo 1 三代広重による東京第3名所銀座通煉瓦石之図  
(東京日々新聞社(現毎日新聞)所蔵)

高さとの釣り合い、整枝剪定の便宜などから低く水平な樹冠に強剪定され、醜い樹形を呈するに至った。この剪定法を長岡安平（当時の東京市公園主任）が問題としたのが契機となり、強剪定からきめ細かい剪定法に改めるべく、土木課道路掛に新たに公園係を設け、長岡らが兼務することになった。このときから、街路樹種選定の議論が本格的に始まる<sup>3, 23)</sup>。

長岡安平は、1903年に公表した『都市の行路樹』において、選択すべき街路樹の要件として、寒暖・地質に適合したもの、速く芽をだして遅く落葉するもの、塵埃に堪えるもの、虫害のないもの、成長の速いもの、葉の広大なもの、夜間悪臭気を放たぬもの、をあげた。その第一の理由は、街路が生物である樹木にとって厳しい環境であること、第二の理由は、街路が公共性の高い空間である以上、多くの人々にとって不快な要素は排除されなければならないということ、第三の理由は、葉の大きい樹木の方が緑陰形成機能にすぐれていること、である<sup>17)</sup>。

この様な意図で長岡安平があげたヤナギに替わるべき新しい街路樹種は、トチノキ、モミジ、センダン、ナンテンギリ、アカメガシワ、トネリコ、エンジュ、カシワ、キササゲ、ホウノキ、アオギリ、ボダイジュ、クヌギ、ケヤキ、ナラ等である。ここには、主に在来種を街路樹に用いようとする明瞭な意思が認められる。

しかし、現実の街路樹選定は、そのようにはならなかった。白沢保美（農商務省林業試験所長）は、1905年にスズカケノキの苗木約30本を試植用として東京市に寄贈した。彼は1907年に福羽逸人（新宿御苑長）とともに街路樹改良のための調査を実施し、「東京市行道樹改良按」をまとめた。東京市はこれ以降、この「改良按」を街路樹整備の基本指針にした。「改良按」で主要市区改正道路に植栽するものとして選択された苗木樹種は、その所要本数の多い順に、スズカケノキ、ユリノキ、ポプラ類、イチヨウであり、「その他の樹種」としてトウカエデ、トチノキ、エンジュ、アオギリ、ボダイジュなどであった。これらは、主に外来種であった<sup>12, 17)</sup>。

白沢保美がスズカケノキをあげたのは、1912年に予定されていた東京大正博覧会の開催を契機に市区改正を促進するには、成長の早いスズカケノキをとりあえず短期間で植栽し、いずれは在来種に変更していくべきとの考えに基づくものであった<sup>1)</sup>。その考え方は、在来種を主張する長岡の考え方にも配慮したものであるが、建物との調和を強調し、積極的

に景観向上に役立たせようとしており、外来種を重視していたことは間違いでない。白沢が景観向上機能を重視したことは、一区域では同一種を同型に仕立て均等間隔で植栽するという当時の植栽方法<sup>9)</sup>にも反映している。

この外来種を中心とする「改良按」をさらに長岡安平らが検討して、実際に育成に着手した苗木樹種は、その育成計画数の順にイチヨウ、スズカケノキ、ユリノキ、アオギリ、トウカエデ、エンジュ、トチノキ、ミズキ、トネリコ、アカメガシワの10種である。「改良按」に挙げられている樹種からポプラ類等が除かれ、長岡が1904年から公園との共用の目的で栽培していたミズキ、トネリコ、アカメガシワ等が加えられている<sup>3, 17)</sup>。結局、長岡は、外来種に重きをおく発想が大勢を占める中で、最大限在来種を追求しようとしたのである。しかしミズキ、トネリコ、アカメガシワは、植栽後の生育不良により後に廃止となった<sup>17)</sup>。

### 3-2 震災前の街路樹の分布

1921年に東京帝国大学農学部農学科で『東京市街道樹論』<sup>5)</sup>を卒業論文としてまとめた横山信二（後に、内務省復興局において関東大震災後の復興植栽事業に係わる）は、東京市内全域の三等以上の市区改正道路を対象に「改良按」に基づいて1907年から1919年にかけて植栽された街路樹の樹種を克明に記録した。この記録によると、植栽された街路樹の総数は約1万9千本。その内訳は、スズカケノキが約34%、イチヨウが約26%、アオギリが約12%、トウカエデが約9%、ユリノキが約7%、トチノキが約5%、ミズキが約4%、トネリコが約3%、エンジュが約2%となっている。これは、先に述べた苗木育成本数の差異に加えて、街路への植栽後の生育成績の良否が数値に反映されたものと考えられる。

この横山信二の記録をもとに「改良按」に基づいた街路樹の植栽状況を筆者らがまとめたのが、Fig.1（グラビア2頁）である。この図から明らかなことは、スズカケノキ、イチヨウのように大量に植栽された街路樹は、例えば、品川—銀座—日本橋—上野の幹線道路がイチヨウの街路樹で統一されているように、単なる一区域同一樹種の原則を超えて、一路線同一樹種の原則にしたがって植栽されているように見えることである。こうした原則の転換は、関東大震災後の復興事業において明確な方針として打ちだされる<sup>11)</sup>のであるが、それが、震災前にも萌芽的に認められたことは注目してよい。

この街路樹分布で特徴的なことの第二は、高雅・上品なイメージをもつユリノキが、皇居外苑（日比谷通り）や日比谷公園周辺など都市美観上重要な地区を中心に植栽されていることである。ユリノキは、スズカケノキと並んで苗木育成計画数が大きい樹種であったが、移植難等の維持管理上の問題が解決されていなかったこの時期においては、重要な地区において限定的に用いざるを得なかったと推察される。また第三に、銀座通りと直交する短距離の街路に、トネリコ、トウカエデ、エンジュ、ミズキ、アオギリ等、ヤナギ中心の当時の銀座には珍しい樹種の植栽が試みられている。これは「通り」の個性を街路樹で特徴づける発想の萌芽であったのではないかと推察される。

#### 4. 震災・戦災後に拡大した東京の街路樹

##### 4-1 震災復興植栽事業と街路樹の選定

「改良按」は思わぬかたちで大活躍することになった。1923年9月に関東大震災が起り、東京は焼け野原と化した。震災前約2万5千本あった街路樹の約6割が焼失してしまった。翌年から始まった東京市による復旧植栽事業だけでは間に合わず、1927年からは内務省復興局が直接復興植栽事業を手がけるようになった。これらの事業により植栽された街路樹の総数は、約2万本にのぼる<sup>11,17)</sup>。

このとき内務省復興局公園課により選ばれたのは、スズカケノキ、イチヨウ、サクラ、エンジュ、ヤナギ、アオギリ、ユリノキ、ニセアカシア、シンジュの9種である。ここでの樹種選定で最も配慮されたのは、成長の早い樹種で街路樹の早期回復を図ること、また、復興を機会に、欧米型近代建築に調和した街路樹を形成することであった。復興局により植栽された街路樹の内訳を見ると、スズカケノキが45%、イチヨウが28%、ニセアカシアが19%、アオギリが3%、ヤナギが2%、サクラが2%であった<sup>11)</sup>。スズカケノキ、イチヨウの占有率がさらに高まり、また、治山事業において早期緑化によく用いられるニセアカシアが大きな比率を占めるに至ったことが復興植栽事業における樹種選定の特徴である。

関東大震災は昼食前に起り、大火が誘発されて、大面積にわたる建物の焼失や未曾有の死傷者を伴う大災害となった。この時、避難場所としての公園の機能が評価され、その後の帝都復興計画においても公園の整備が進むことになるが、街路樹も防火の役割を果たすことが証明されて、街路樹の復旧に対する

市民の合意も高まった。幸い、東京郊外にあったいくつかの苗圃が被害を受けなかったことから、街路樹の復旧に早急に着手することができた<sup>16,21)</sup>。

震災後、農商務省山林局によって樹木の耐火力の調査がなされた。その結果は、イチヨウ、ヤナギが最もすぐれ、スズカケノキ、ユリノキ、ニセアカシアがそれに続くというものであった<sup>11)</sup>。復興植栽事業にこれらの樹種が多く用いられたのは、耐火性を重んじた結果と考えられる。Fig.2（グラビア3頁）に、復興植栽事業によって植栽された街路樹の分布を示す。

この図から明らかなことは、イチヨウの街路樹が

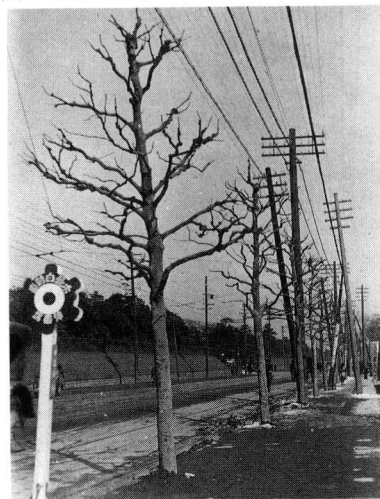
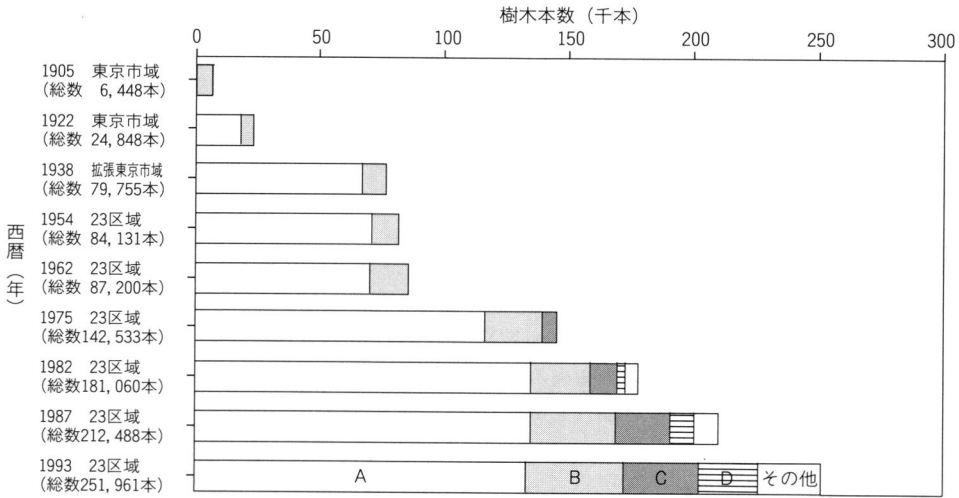


Photo 2 青山一丁目のスズカケノキの街路樹  
(1925年、石神甲子郎氏撮影)<sup>37)</sup>



Photo 3 東京市神田区にて、関東大震災時に焼失した街路樹の  
替りとして植えられたヒマワリ  
(1925年、石神甲子郎氏撮影)<sup>37)</sup>



A類—スズカケノキ/イチヨウ/トウカエデ/エンジュ/モミジバフウ/ユリノキ/フウ/ミズキ/ニセアカシア/アオギリ/トチノキ/トネリコ/ポプラ/シンジュ/メタセコイア/アカメガシワ/イヌエンジュ/センダン  
 B類—サクラ類/ヤナギ/クロマツ/ケヤキ/アキニレ/クワ  
 C類—クスノキ/マテバシイ/ヤマモモ/ウバメガシ/スダジイ/シラカシ  
 D類—ハナミズキ/ツバキ/コブシ/サルスベリ/ウメ/カエデ類/シャラノキ

Fig.3 樹種群 (A、B、C、D) の占有状況の変遷

幹線第一号 (現在の昭南通り・第一京浜) に沿ってほぼ東京の山の手と下町を分断するかたちで植栽されていることである。古くから「火防せの木」として知られているイチヨウは、耐火性ととも防火性にもすぐれている。当時の街路樹植栽に大きな影響力をもっていた東京市公園課長の井下清もイチヨウの防火性を高く評価しており<sup>6)</sup>、結果的に、長大なイチヨウの街路樹を東京都心部の防火帯として機能させようとしたと考えられる。

4-2 戦災復興

終戦直前の東京大空襲は、市街地に大きな被害を与え、街路樹もほとんど壊滅状態となった。しかし、戦災復興期の社会経済情勢の中では、街路樹整備が省みられることは少なく、街路樹整備が本格化した1951年から1958年の東京都の街路築造工事における街路樹植栽数で見ても、約5千本と低いレベルにとどまっている。植栽された樹種は、スズカケノキ、ヤナギ、ケヤキ、サクラ、イチヨウ、トウカエデ、エンジュ、アオギリなどであり<sup>24)</sup>、震災復興期の樹種選定が基本的に踏襲されたものと言える。

しかしながら、ケヤキの植栽本数の増加が見られることは、新しい傾向であり、1950年代後半からのアキニレの導入とともに、郊外住宅地開発において、在来種を評価しようとする姿勢が認められる。郊外住宅地は、いわゆる武蔵野の新田や雑木林から転換

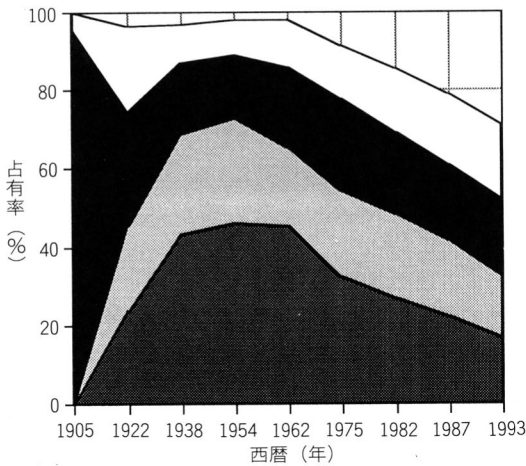
したものであり、葉の大きい欧米型の街路樹は木造低層の住宅地景観や地域の自然景観にそぐわないと判断された結果ではないかと考えられる。

5. 近年の街路樹選定の考え方

5-1 明治以降の街路樹選定の潮流

つぎに、東京の街路樹選定がどのように変遷してきたかを、可能な限り数値的に追ってみた。参考文献13) 17) 及び東京都建設局公園緑地部資料をもとに、それをまとめたものが Fig.3 である。ここでは数多くある樹種を、凡例に示すように、[A:スズカケノキ、イチヨウなど幾何学的な樹形をもつ主に外来種の落葉樹種群、B:サクラ、ヤナギ、ケヤキなどの主に在来種の落葉樹種群、C:クスノキ、シラカシなどの在来種の常緑広葉樹種群、D:ハナミズキ、サルスベリなどの花木を中心とする在来・外来両種を含む主に落葉の樹種群] の四つのグループに区別した。

この図をみると、東京の街路樹数は、戦後に停滞期が見られるものの、めざましい増加を遂げていることが分かる。樹種群に注目すると、明治の初期には、江戸の伝統を受け継ぐB群のサクラ、ヤナギが優先するが、それ以降は一貫して欧米型街路の形成にふさわしいと考えられたA群が主流を占める。しかし、戦後、郊外住宅地の開発が進むと、郷土種で



■ スズカケノキ  
□ イチョウ  
■ スズカケノキ、イチョウ 以外の上位5種  
□ 6～10位種

Fig.4 上位種の占有率の変遷

あるB群のケヤキなどの植栽が進む。また自動車公害が深刻になった1970年代後半以降には、常緑広葉樹のC群が増加する。さらに、都市のアメニティ整備が重視され始めた1980年代後半には、D群も増加するようになる。

街路樹の樹種選定に関するもうひとつの特徴は、とくに戦後になって街路樹の樹種の多様化が進んだことである。Fig.4は、ある時点における街路樹の樹種のうち上位5種が全体に占める割合を示したものである。このグラフによると、1954年には上位5種（スズカケノキ、イチョウ、サクラ類、ヤナギ、エンジュ）で約90%を占めていたのが、その割合は徐々に低下し続け、1993年には、上位5種（スズカケノキ、イチョウ、サクラ類、トウカエデ、ハナミズキ）の占める割合は約50%程度にまで低下している。また1993年には、ハナミズキが約6%、クスノキ、マテバシイがそれぞれ約4%、ヤマモモが約3%を占め、新しく導入された花木や常緑広葉樹が、上位10種に顔を出している。

このような街路樹の樹種の多様化には、区道の街路樹植栽数の伸びがその一因となっている。1961年以降、区道の街路樹植栽がそれぞれの区に委ねられるようになると、それぞれの区が独自に樹種選定を行うようになり、街路樹の樹種において区ごとに特徴がみられる<sup>32)</sup>ようになった。また街路樹の樹種研究の活発化もその一因となっていると考えられる。大正期から昭和初期にかけて活発に行われたこの種



Photo 4 都市公園と一体的に整備された植樹帯  
(東京・日比谷公園にて、武内和彦撮影)

の研究<sup>2,4,8,9)</sup>は、東京市における研究<sup>6,10)</sup>を除いては、当時は活かされることが少なかった。しかし戦後、再び活発に行われるようになったこの種の研究<sup>18,19,25,27,29)</sup>の成果は、植栽技術の進歩と相俟って実際の植栽にも活かされるようになった。

## 5-2 公害防止と常緑街路樹の活用

以上の分析で分かるように、明治以降一貫して街路樹は落葉広葉樹が主流であった。そもそも、明治初期に欧米を視察した岩倉具視、津田仙、田中芳男らは、「街路樹＝落葉樹」とする欧米の街路樹観を当然のごとく受け入れた。とくに津田仙は1979年に公表した『擁道樹論』において、常緑広葉樹の防火上の役割は認めつつも、日光の遮断が、降雨・降雪後に当時は未舗装であった道路にぬかるみを生じさせ、通行に障害を与えると述べている<sup>23)</sup>。

常緑樹が街路樹としてとくに注目されるようになったのは、都市の大気汚染が進行した結果、都市における常緑樹の相対的優位さが明らかになったためである。はやくも、1921年にまとめられた『明治神宮御境内林苑計画』では、本来神社林の主木とすべきスギ、ヒノキが鉄道の煤煙などによる亜硫酸ガスの被害を受けやすいため、郷土種である常緑樹のシイやカシ、成長の早い常緑樹であるクスノキを明治神宮林の将来の主木にすべきであると主張している<sup>28)</sup>。

とくに東京の大気汚染が極度に悪化した1960年代後半には、皇居外苑のクロマツが毎年20本も枯れたため、常緑樹の補植を行うとともに、洗浄車でマツ

についた煤を洗ったという。1974年には工場立地法が制定され、一定規模の工場敷地の20%以上を緑化することが義務づけられた。この頃から、常緑樹の苗木が大量に生産されるようになり、工場周辺の樹林帯に植栽されるようになった。それと同時期に、クスノキ、マテバシイ、シラカシ、ウバメガシなど大気汚染に強い常緑樹が街路樹としても植栽されるようになった。常緑樹は、等間隔に列状に植栽されるほか、環状7号線に見られるように落葉樹や低木と混植されるケースも出現した<sup>33)</sup>。

こうした街路樹植栽の考え方は、明治・大正時代のように、特定の人物の街路樹観に基づくものではない。むしろ、自動車公害に反対する市民運動に促されて、道路管理者が常緑広葉樹を積極的に導入し、また従来の等間隔の街路樹植栽に変えて、高木と低木を組み合わせた高密度な植樹帯をもうけるようになったと考えられる。東京都建設局が1990年に公表した『東京都街路樹マスタープラン検討委員会報告書』<sup>33)</sup>でも、「1970年代に住民運動が起こり、一定の間隔において列状に植えられた従来の街路樹からは考えられない新しい多様な植栽方式、あるいは画期的な歩道部分の取り扱いが、行政と住民との協力の中から生まれた」と述べている。

### 5-3 都市アメニティと花木の導入

植樹帯形成の試みは、今日、単に自動車公害に対する環境対策にとどまらず、街路そのものの公園化にもつながっている。日比谷公園や上野公園の周辺道路では、公園と街路を峻別しない、一体的な環境整備が試みられているが、これは、都市アメニティの向上を目指したものと言える。こうした考え方が顕著になるのは、先に述べたように1980年代後半以降のことであり、街路樹にハナミズキやサルスベリなどの花木を多用するようになった時期と符合する。

常緑樹と並んで花木もまた、サクラを除いて街路樹としては避けられていた。津田仙の『擁道樹論』でも、目立った花や実のなる樹木は、窃取されやすく、樹勢的、風致的に好ましくないと述べている<sup>23)</sup>。またウメやサザンカのような低木も、装飾的意義はあるが、気候調整・衛生に対して役割を果たさないと述べている。花木・果樹の街路樹への導入や、高木・低木の群植による植樹帯の形成は、1925年に三木謙吾が述べたような「整一美」を街路樹に求める観点からは好ましいものではない<sup>7)</sup>。しかし、街路樹に「整一美」を求めなければ、それもまた新しい街路樹のあり方につながるのである。それが最も先

端的な街路樹論と言える。

「整一美」からの脱却は、いわば、江戸の花弁文化への回帰と見なしうるものである。それが、東京の都市公園周辺や郊外住宅地の街路で始まったことは、注目されてよい。なぜなら、それは、常緑樹の導入と並んで日本の風土にふさわしい街路樹のあり方を模索している過程と見なすことができるからである。おりしも、欧米に範を求めていたこれまでの都市計画への反省から、江戸の都市システムを再評価しようとする動きが高まっている。街路樹についても、日本の都市づくりのあり方と連動させ、そのあり方を再検討すべき時期にきているのではないか。

## 6. おわりに

こうした街路樹のあり方に関する再検討項目の中には、当然、都市環境計画において議論されている<sup>34)</sup>ような、都市気候緩和のための「風の道」としての広幅員街路と街路樹帯の形成、災害時の避難路とともに、日常的には人間や野生生物の移動廊として機能する緑地と街路樹のネットワーク化が含まれていなければならない。都市アメニティの向上も踏まえて、論理性をもった環境時代の街路樹論を展開することは、都市の環境思想を構築するためにも有意義と考えられる。

しかし、一方で、街路樹は、それぞれの時代の環境思想を反映したものである。その結果が、現在の東京の街路樹分布に投影されている。ある一時代の思想ですべての街路樹を置き換えてしまえるのは、震災時のような非常時だけであろう。少なくとも、今なされるべきことは、「これまでの歴史の蓄積の上に成り立つ街路樹の樹種の多様化を前提として、新しい時代の街路樹選定の考え方を確立すること」ではなかろうか。

### 参考文献

- 1) 三宅馨『都市の研究』実業之日本社、pp.27～132、1908年
- 2) 本多静六『明治天皇記念、行道樹篇、附緑蔭樹』三浦書店、pp.III/1～III/91、1913年
- 3) 井下清「道路樹木の研究」『庭園』第1巻2号、pp.20～26、1919年
- 4) 大屋壺城「街道樹論」『日本建築協会雑誌』第2巻7号、pp.61～64、第2巻8号、pp.56～60、第2巻9号、pp.51～55、第2巻10号、pp.58～64、1919年

- 5) 横山信二『東京市街道樹論』東京帝国大学農学部農学科卒業論文、1921年
- 6) 井下清『街路樹(都市講話第1冊)』東京市政調査会、pp.23~44、1925年
- 7) 三木謙吾「道路並木の話」『庭園』第7巻3号、pp.14~16、第7巻5号、pp.14~16、第7巻7号、pp.18~20、第7巻8号、pp.18~21、第7巻10号、pp.20~22、第7巻11号、pp.16~18、第7巻12号、pp.10~13、1925年
- 8) 上原敬二「道路樹木とそれに関する考察(其一)」『造園学雑誌』第2巻10号、pp.21~36、1926年
- 9) 三浦伊八郎「並木の樹種と其の美」『庭園と風景』第9巻5号、pp.2~3、第9巻6号、pp.6~9、第9巻9号、pp.8~10、1927年
- 10) 三木謙吾「街路樹の樹種選定に対する東京市の研究」『庭園と風景』第10巻8号、p.20、1928年
- 11) 復興事務局『帝都復興事業誌、木土篇、上巻』復興事務局、pp.48~93、1931年
- 12) 河野利明「プロムナードの王者鈴懸木」『庭園』第18巻2号、pp.67~68、第18巻3号、pp.112~113、1936年
- 13) 横山信二「街路樹に就いて」『公園緑地』第1巻1号、pp.69~73、1937年
- 14) 井下清「街の柳」『公園緑地』第3巻7号、pp.32~33、1939年
- 15) 横山専一「東京市街路樹発祥の一端」『公園緑地』第3巻7号、pp.45~47、1939年
- 16) 公園緑地協会「(座談会)路傍樹を語る」『公園緑地』第3巻7号、pp.14~28、1939年
- 17) 東京市役所『東京市道路誌』東京市役所、pp.438~483、1939年
- 18) 江山正美「都市樹帯と適応樹種について」『戦災復興院技術研究所要報』第20号、1-5、1947年
- 19) 丹羽鼎三『都市における公共緑化施設基準に関する研究報告書』東京都、pp.1~57、1955年
- 20) 前島康彦「なみきだんぎ」『都市公園』第9号、pp.59~61、1957年
- 21) 都市公園編集部「(座談会)東京の街路樹の想い出」『都市公園』第9巻11号、pp.62~68、1957年
- 22) 本間啓・福富久夫「街路樹植栽基準に関する考察」『造園雑誌』第21巻3号、pp.5~8、第22巻4号、pp.13~17、1958年
- 23) 井下清『街路並木』全国市長会、pp.1~245、1958年。津田仙の『擁道樹論』が巻末に収録されている。
- 24) 建設省『戦災復興誌第10巻 都市編VII東京都』都市計画協会、pp.126~129、1959年
- 25) 本間啓「わが国の都市と街路樹」『公園緑地』第29巻1号、pp.18~26、1968年
- 26) 佐藤昌『道路と造形-並木と植栽-』都市計画研究所、pp.2~63、1969年
- 27) 東京都建設局公園緑地部『今後の道路緑化計画に使用する樹種の選定及び植栽方式等に関する調査報告書』東京都、pp.1~22、1969年
- 28) 明治神宮境内総合調査委員会『明治神宮境内総合調査報告書』明治神宮社務所、pp.1~505、1980年
- 29) 井上忠佳・藤原宣夫「わが国の街路樹について」『公園緑地』第45巻4号、pp.47~51、第45巻5号、pp.43~46、第45巻6号、pp.45~51、1984年
- 30) 篠原修「日本の街並と近代街路設計」『土木学会誌』第69巻8号、pp.77~90、1984年
- 31) 木村三郎「東京市区改正設計と街路樹問題」『都市公園』第86号、pp.2~8、1984年
- 32) 藤崎健一郎「街路樹植栽の歴史と現況」『公害研究』第15巻1号、pp.42~47、1986年
- 33) 東京都建設局公園緑地部『東京都街路樹マスタープラン検討委員会報告書』東京都建設局公園緑地部、pp.1~302、1990年
- 34) 建設省都市環境問題研究会『環境共生都市づくり-エコシティ・ガイド-』ぎょうせい、pp.1~443、1993年
- 35) 平澤毅「近世以前の日本における並木の成立と発展」『IATSS Review』第22巻1号(印刷中)、1996年
- 36) 唐沢孝一「都市鳥から見た街路樹の役割」『IATSS Review』第22巻1号(印刷中)、1996年
- 37) 石神甲子郎「並木トシテノ落葉樹及常緑樹ノ比較」東京帝国大学農科大学卒業論文、pp.1~186、1925年